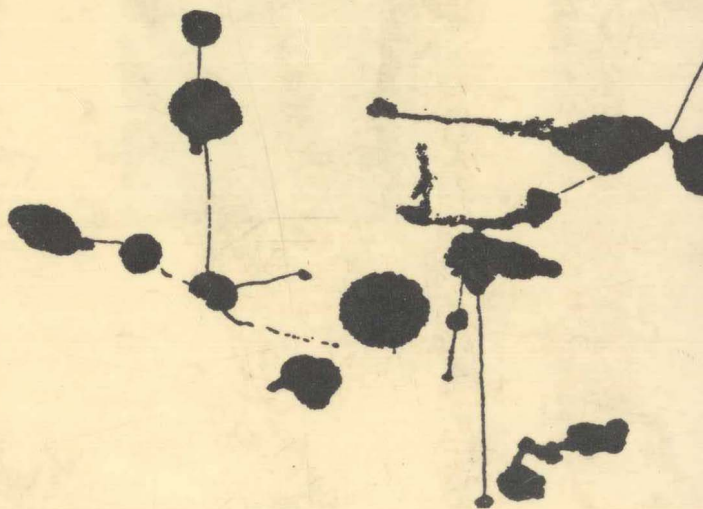


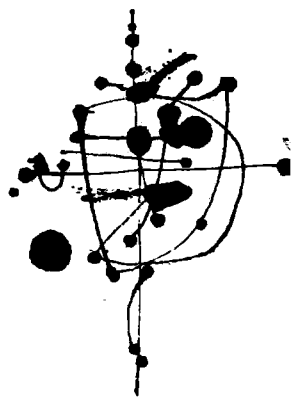
有吉佐和子

連舞・乱舞

(つれまい
みだれまい)



有吉佐和子
連舞・乱舞



新潮社版



連舞・乱舞

有吉佐和子選集第五卷

昭和四十六年三月二十日 発行
昭和五十二年五月三十日 十刷

定価 一〇〇〇円

著者 有吉佐和子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 03(551)五一
編集部 03(551)五四一一
振替 東京四一八〇八番

印刷 塚田印刷株式会社

製本 株式会社大進堂

© by Sawako Ariyoshi, 1971, Tokyo

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

連
舞・
乱
舞

連

舞

妹の千春が生れたときのことを、秋子はまるで昨日の出来事のように克明に思い出すことができる。秋子はそのとき数え年の六つで、その幼さでは母親の出産前後を如実に記憶するのは無理な筈であったが、そう自分で考えることがあってもなお、秋子は頑かたくに、千春が生れたときのことを、寸分の違いもなく自分は思い出すことができるのだと思っている。

それは南向きの縁側も、まだあしのうらに冷たく感じられる早春の出来事であった。朝まだき、秋子は自分の部屋の前の廊下を、慌しく人が行き交うあしおと登音を聴いて目を覚めた。隣の寢床は蛻もぬけの殻で、いつもは秋子より朝のおそい糸代の姿もなかった。子供心にも、この家の中に異変が起っていることは感じとれた。秋子はそっと起上り、寝巻の前を掻き合わせながら廊下へ出た。

内弟子たちは、皆起き出っていて、秋子の母親の居間と、台所の間を忙しく往来していた。誰も緊張した表情で、寝巻姿の秋子を認めても、それに注意を払ったり、声をかけたりする者はない。素足で廊下に行めば、冷気が躰からだに浸みってくる。秋子は、この家の中で、急に自分が疎外された始めたのを、感じないわけにはいかなかった。

産婆が内弟子の一人に手を曳くようにされて、秋子の目の前を駆け抜けたが、その中年女の醜く肥満した後ろ姿は、秋子の幸福を奪って過ぎた怪物のようであった。ずしずし、と響く彼女の登音は、廊下を伝って秋子の躰にずし、ずしと、太い杭でも打込むように響いた。梶川寿々の一

人娘という地位が、その杭の先で叩き潰されて行くのを、秋子は既にこのとき予期していたのである。

母親である寿々の部屋には、這入れなかった。入口に内弟子たちが息を詰めて控えていて、誰も秋子を顧みなかったし、秋子と一番親しい糸代は部屋の中にいるらしくて、姿が見えなかった。奥から苦しそうな呻きが洩れてきたが、秋子にはそれが母親の声とは思われず、異様な雰囲気の中から、異形なものが部屋の奥にいて、それが呻いているのではないかと思ってしまった。後退りして、秋子は母親の部屋から離れたが、自分が後退りしているのではなく、母親という存在が自分から遠のいていくように思われた。それは、幼い子供の心には、支えきれないほどの大きな絶望感というものであった。

千春の産声を、秋子は稽古場の舞台の上で聴いた。自分の寝室に戻って寝る気になれなかったのと、内弟子たちの蒲団を敷いてない部屋というのは、この家の中では台所と稽古場以外にはなかったからである。梶川流で上根岸かみねぎしといえ、もうずっと前から寿々と通じるくらい、若い頃から名の通った踊り手である寿々は、踊りと男以外には贅沢のないひとであったことでも有名で、だから上根岸の家も決して大仰な構えでなく、内弟子の数の割合からすれば間数も少ないこぢんまりとしたものであったが、その造作分を稽古場にかけて、舞台は三間間口の総檜造りという町の師匠にしては立派すぎるほど見事なものであった。

蹠が冷えきっていたけれども、秋子はそれよりも胸のあたりが寒くて、寝巻の袖で自分の胸許を抱くようにして舞台へ上った。痾性の寿々は床の間にも掛軸以外の飾り物は置かないほどで、だから舞台には衝立のような道具一つなく広々としていた。上手から舞台の奥にかけて、長押ながしに寿々が取立てた名取札がずらりと並んで打付けてある。

梶川寿々の札が一際大きく、続いて名取り筆頭の梶川寿三代、梶川寿々枝、梶川寿喜、梶川寿美、梶川寿志栄、梶川寿美礼、梶川寿久、梶川寿々香、梶川寿栄、……寿々の寿の字をとった名取名の丁度中程に、糸代の梶川寿々糸という名取札があった。秋子は、まだ小学校に上っていないし、難かしい漢字の文字群は、読むどころか見馴れてもないのであったけれども、やはり梶川流の師匠の家に生れた者として三味線の音締が耳に親しいのと同じように、梶川の名取名には目も馴染んでいた。糸代の梶川寿々糸は、ずしと読むことを先に知っていて、いつであったか、もうずっと前に、舞台を空拭きしていた糸代が、

「お嬢ちゃま、私の名取札は、これですよ」

背伸びをして指さしたのを覚えている。

その、梶川寿々糸の名取札に目を止めたときであった。奥から千春の産声が聞えたのは。

咄嗟に、秋子は子供が産れ出たということよりも、先頃から感じていた異変が、ようやく形になったと思った。千春の泣き声は、秋子がこれまでに聞いたどの赤ん坊の泣き声より大きく、けたたましかった。この世に生を享けたことを、こうも無遠慮に示していいものであろうかと思われるほど、大きく、けたたましい泣き声であった。秋子は最前の産婆の登音で碎けたものが、この泣き声で四散するのを感じていた。秋子の心の中にある誇りも幸せも、蹴散らかして顧みないような傍若無人な喚き声であった。

舞台の中央で胸を抱いたまま、秋子は硬直していた。長い、長い時間がそうして過ぎた。新生児の産声としても、千春の泣き声は、産婆が後々まで一つ話にしたほど、息の長い勇ましいものであったのだが秋子はそれを肩や足を凍らせて聞いていたのであった。

子供が産れてから七日目の、いわゆるお七夜の日まで、千春の父親は、この家に現われなかつ

た。秋子は、千春の産声はまだ耳許に残っているほどよく覚えていたのに、彼女が生れた翌日からお七夜までの記憶はまるでなくて、そのかわり、梶川猿寿郎が現われた日のことは、また克明に覚えている。

それはひどく薄寒い日の午後で、玄関の戸が開くと、

「お家元です」

誰かが早口に云い、すると家の中で一斉に、

「お家元ですよ」

「お家元が見えました」

「お家元が」

「お家元です」

連鎖反応のように家の中の者たちが口々に奥へ伝えた。

秋子はそのとき丁度手洗いから出て、庭先の手水鉢ちようすひちの水をつかっていたのだったが、家の中の囁きは聞えていて、家元というのは誰なのか、この家で今、家元というのはどういう立場にあるものなのか、言葉にはならないが全身でびりりと感じとっていた。

梶川猿寿郎は、毛織りのインパネスを着たままで秋子の目の前の廊下を渡って歩いて行ったが、前後に女どもを従えていて、この家を彼が訪れたのは始めてではないのに、どこか物々しい気配が彼の跡を包んでいた。秋子は、この日の白髪頭の首をすくめた老人の後ろ姿を、今になっても忘れることができない。それというのも、秋子がこの七世梶川猿寿郎を見たのは、これが最後だったからである。そして、母親を愛した男というより、妹の父親である男として、この日見た猿寿郎は、その後秋子が実に頻繁に彼を思い出すときの姿となった。

七世猿寿郎は、家元名を襲う前の名を三千夫といい、それは彼の戸籍名でもあった。

若い頃は放蕩の限りを尽して、女出入りの揚句に親から勘当され、上方で修業していた時期もある。先代の家元が急病で斃れたとき呼び戻され、そして七世を襲った人なのだが、女極道は一向に改まらなかつた。女好きのする顔立ちである上に、踊りの才能が並外れていて、今の梶川流を全盛に導いたのは彼の功績であると云われるほど、その見事な舞いぶりは人々を魅了せずには措かなかつた。踊りの世界には女が多い。それも若く美しい女たちが舞いふりは人々を魅了せず、猿寿郎の愛を享けることに、命を賭けるほどひたむきにはならないことになっていた。梶川流の門下でも、猿寿郎と割りない仲になった女たちの数は十指にも余つたのである。

秋子たちの母親である梶川寿々も、自分がその中の一人であり、それ以上の者でないことは充分に知っていた。だから、千春の名をつけるべき日になって、ようやく猿寿郎が顔を見せたことにも、それまで放つて置かれたのを恨むどころか、却つて思いがけない来訪であつたことを喜ぶような有様であつた。

まだ床の中にいた寿々は、急いで半身を起して胸許を身づくろつたが、三十三歳になる彼女が、白っぽい寝巻の肩に黒髪を散らした姿は紅っ気がないのが却つて仇っぽく美しかった。猿寿郎も最初にそれを認めたらしい。

「美しい女になったな」

挨拶がわりの言葉であつた。唖れた声で云い終ると、ごほつと大きな咳をし、拳で顔を叩いた。が、彼が来た目的は寿々を見舞うことよりも、千春にあつたらしい。咳を治めると、猿寿郎は急いで寿々の隣の小さな蒲団に寝かされている自分の娘を覗きこんだ。

「うむ、うむ」

彼は満足を言葉で現わせずに、ただ唸っていた。この七日の間、彼は直ぐにも飛び出したい想いを本妻に力ずくで押えられていたのである。年齢よりは嬰鑠かくしやくとしても、還曆を迎えた彼にとって、女に子が出来るといふのは思いがけない由々しきを持つていた。それは、單なる父性愛の喜びでなく、自分の生命の確認というものであったに違いない。

「うむ、うむ」

猿寿郎は、内弟子たちに助けられて、子供を抱きあげると、目を細めて娘の顔を眺めた。

「うむ、可愛い。器量よしじゃ」

頬ずりもしかねないほどの愛しみ方であつた。

生後七日目の赤ん坊は、肌の色もまだ美しくなかつたし、目鼻立ちも判然としていなくて、小さいこと以外には可愛いさなど感じさせるものは何も持つていなかったのであるけれども、猿寿郎は嬰兒を老いた膝に抱いて、いつまでも離さなかつた。その有様は、多くの女を愛しながら、遂に一人の女に執着しなかつた猿寿郎を知る者にとっては、意外なほどであつた。

「お家元、今日は、お七夜なんですよ」

寿々が云つた。

「うむ。名前は考へてきた。筆を持つて来い」

腰を浮かした内弟子の一人に、寿々は、

「扇子を。新しいのだよ」

と、云つた。

蒔絵の硯箱と、梶川流の梶ノ葉に流水の紋章が紅で銘のように小さく刷り込まれた白扇が、猿

寿郎の前に整えられた。七世家元は、筆先にとつぷりと濃い墨を含ませると、扇の中央に大きく「千春」と書き、昭和六年三月七日、七世猿寿郎と達筆で署名してから、誇らかに寿々にそれを示した。

「まあ」

感動して言葉のない女に、

「ちはる、と読む。どうだ、いい名前だろう。僕の本名が一字入っているぞ」

と、猿寿郎は、自分でも惚れ惚れするように、いつまでも眺めていた。

流派に連なる者にとって、家元は絶対的な存在である。彼は神格化され、そうすることによって門弟たちは各自の地盤を安定させることができた。梶川流を学ぶ者にとって、梶川猿寿郎は至上の存在である。まして女たちの間で、猿寿郎は老いても尚、渴仰かつうされていた。その人の愛を享けて子を産んだ今、寿々の心中はどんなものであったらうか。猿寿郎の手から白扇を受取ると、寿々は押し頂いて、はらはらと涙を流した。この涙は、おそらく家元を頭に頂く流派に連なった経験のない者には、芝居めいた感傷としか理解できないかもしれない。が、そういう人々でも、後年、寿々が千春に賭けた一時期を見れば、このときの彼女の涙を読むことができるだろう。

千春という名前には、猿寿郎が云ったように、彼の三千夫という本名から一字とっただけの意味以上に、もっと深いものがあつたようである。三月の生れだから、春も由縁ゆかりがないわけではない。しかし、千の春という文字には、猿寿郎の生命の願望が秘められてはいなかっただろう。

千春は、実の父親によって名付けられても、猿寿郎の戸籍には入れられなかった。戸籍の上での彼女は、寿々の本名である松本すずの私生児であり、梶川三千夫が認知したということになった。姉の秋子は、寿々の妹夫婦の子としての戸籍を持っていたのに、千春には寿々は認知だけで

も猿寿郎の名前を冠せていたかったのである。

猿寿郎は、折にふれては上根岸に足を向けるようになったが、女である寿々はもはや顧みず、ただ千春だけをあやして、それで満足して帰って行った。その姿には、晩年の子を恋う哀れさがあつたけれども、誰もそれを口に出して云うものではなく、彼が現われればその都度、

「お家元です」

「お家元ですよ」

「お家元が」

「お家元です」

大騒ぎで出迎え、もてなすのであつた。

秋子は子供心にもこうした騒ぎの度に、自分と千春との違いというものを考えないわけにはいなくて、

「私のお父さんは誰？」

糸代に訊くことがあつたが、すると糸代は当惑して、口ごもりながら、

「ずっと前に亡くなつたんですよ」

と云つた。

「どんなひとなの？」

「私は知りませんよ、お嬢ちゃま」

町師匠の家の内弟子というのは、二種類あつて、下女同然に働きながら踊りの稽古をつけてもらう者と、親元から充分な月謝と生活費の仕送りを受けながら同じ家に寝泊りしているだけの者とがあつたが、糸代は前者で、十二の年から梶川寿々の許に来ていた。秋子が生れたときからの、

入門であり、その頃は内弟子の数も今ほど多くはなかったから、糸代が秋子の世話をするのはごく自然の成行きであつた。子供好きで、働き好きで、万事が地味な糸代は、師匠の娘の世話をすることを誇りとして、まめまめしくよく仕えた。十七歳で寿々に取立てられて梶川の名をもらい、この稽古所では時々代稽古もするほどの技倆であつたが、何分にも若すぎるし、小柄が災いして舞台映えのしない損な舞手であつたから、決して目立たなかつた。それでも、一人娘の秋子を、すっかり寿々から任されているので、他の弟子たちからも一目置かれてはいた。

土地柄で、下谷の芸者たちが多勢稽古に来ていたが、出産後の寿々はしばらく立つて教えることができないので、そうすると振りの記憶力が人一倍いい糸代が、代りに稽古をすることになつた。三味線は、やはり内弟子の寿々美が弾いた。

ひよつくり、ひよつくり、ひよつくりひよつと、罷り出でたるやつがれは、色にも酒にも目なし鳥。

どつこいさうは虎の皮、禪のはしは取られても、

恋の手取りの僧法師、なかなかその手ちやまゐるまい……

「座頭」のように早手間で、軽い踊りなら大過はなかったが、同じ清元でも「七小町」のように情緒的なものであつたり、「葱売り」のように芝居がかったものになると、寿々は下手な弟子たちをじれつたがつて、

「違ふよ、違ふつたら。なんだい、その恰好は。それで小町のつもりかい？ 呆れるよ、今日限りで踊りはやめちまいッ」

かあっと一息に怒鳴るのである。

それが教えられている者に投げつけられるときはまだよかったが、代稽古に立っている者が標的になってしまうと、目も当てられなかった。

「糸代ッ。そんなことを、いつ、誰が教えたよッ。なんだい、お前この家に、いったい幾つの時から来てるんだい？ 何を見て暮してんだ。あたしが、そんなぶざまな形で踊ったことが、一度だってあったかよッ。着物畳んで田舎へ帰っちまいッ」

激しいときには、革製の張り扇が、びしりと胸許へ飛んでくる。

「見ちゃいけないよ、ああッ。今日は稽古を止めた。みんな帰れ、帰れッ。お寿々さんは弟子が粗末で、店を張ってられないのさ」

生れは日本橋の紅屋の娘なのだが、幼いときに零落して芸者に売られたという生い立ちの寿々は、根が我儘で勝手者だったから、一度口を切って怒り出すと鎮まるのに大層時間がかかった。

「おすずのように怒鳴りつ放しに怒鳴っていたら、さぞ胸も腹もすかすかして、いい気持だろうな。江戸前の踊りになると、誰も真似手がないのは、そのせいだろう」

家元の猿寿郎が、感心したりするものだから、寿々の毒舌はいよいよ天下御免になってしまい、そうなるこれがまた評判になって怒鳴られる方も、気を滅入らせることがなく、却って稽古に励むという妙な循環になった。

事実、手のつけられないほどの下手な踊りに対しては、寿々は口を結んで、つまらなそうな顔をして見ているだけで、何も云わなかった。怒鳴られるのは、脈のある弟子に限られていると、いつか人々は思うようになっていた。

秋子は、人形遊びやままごとにも倦きると、よく稽古場へ出かけて行って片隅に坐っていたも